
Bloody Blue

黒鬼風斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B l o o d y B l u e

【Nコード】

N 6 4 2 1 U

【作者名】

・黒鬼風斗

【あらすじ】

要人暗殺を主な仕事とする組織 “ B l o o d y B l u e ”。ある日、“ B l o o d y B l u e ” にいつものようにアルグレイス国の大臣から届いた依頼は、これまでとは全く異なるものだった。内容は隣国であるリゲツ国に存在する同業者、“ヴァル一味”を壊滅させるというもの。時同じくして、リゲツ国の“ヴァル一味”にも同様の依頼が届いた。内容はアルグレイス国の“ B l o o d y B l u e ”を壊滅させるというもの。

“ Bloody Blue ” に所属するレイヴンと “ ヴァル一味 ” に所属するルーシエ。二つの勢力がぶつかりあった時、果たして生き残るのはどちらだろうか。

この小説の一部は友人のサイト、某SNSサイトにも投稿しております。

0 「Dead or Dead」

0 「Dead or Dead」

カッン、カッン。

それは自らの存在を自分以外の誰かに伝える音。

カッン、カッン。

それは地獄へのカウントダウンの音。

カッン、カッン。

あるいは、天国へのカウントダウンの音。

……カッン。

ふと、足音が止まる。だがしかし、獲物へと歩み寄るその足が止まった訳ではない。

“彼”は足音を消したまま、先程と同じように暗く、長い螺旋階段を降りていく。辺りは松明の一つもない真っ暗闇で、遙か遠くの花井から漏れる光は既に“彼”の元へは届く事はない。先程まで響き渡っていた足音がまるで嘘のようにその場は静まり返り、自らの小さな吐息や心臓の鼓動でさえはつきりと感じる事が出来た。

そして新たに感じる。自らの吐息ではない、何者かの荒立った吐息。それは自らの遙か上からか、それとも下からか　迷う間でもない。何者かが自らの上にいる筈がないのだから。

“追う者”と“追われる者”。“追われる者”が螺旋階段を下りに下って逃げている以上、“追う者”が留まる事はない。だが“追われる者”は足音が無くなった事から、荒立った息が徐々に安堵の混じった吐息へと変化していく。

「愚カダナ」　“追う者”の唇がそう動いた。“彼”には獲物の動きが手に取るように分かっていた。幾度とない経験が“彼”をそうさせているのだ。経験にない行動をする獲物など、少なくとも“彼”が今まで追っていた獲物にはなかった。

そして今回の獲物も、例外ではなかった。

“彼”が足音を立てずに階段を折り続けて、時計の分針が何度か小刻みに動いた後だ。

「くくくく……っ」

低く、小さくだが、“追われる者”が声を押し殺したように笑う。愚かな獲物は、逃げ切ったと思ったのだ。自らが勝利したと確信したのだ。

「本当ニ愚カダ」　“彼”の唇が再び動く。

そして次の瞬間、

ガンッ！

と“彼”は階段を強く蹴り、跳んだ。同時に「ヒイツ」と獲物が小さな声を上げる。

“彼”の姿は螺旋階段の中央　まるでぼっかり空いたドーナツの穴の中のような場所にあった。重力に引かれるまま、長い長い螺

旋階段を足を付ける事もなく静かに下っていく。時計の秒針が幾つ動いた頃だろうか、“彼”は突然手を前へ伸ばし、階段の淵を掴んだ。そして落下時に生じた衝撃がその階段を掴んだ腕に伝わる前にその腕に力を入れ、大きく前宙した。一回転した“彼”はまたしても音もなく階段に何事もなかったかのように降り立ち、いつの間にか腰のホルスターから抜いた一丁の拳銃を前方へ向けていた。

その銃口の先に、“彼” “追う者”の獲物 “追われる者”がいた。“追われる者”の身体は既に傷だらけで、衣服を自らの血で塗らしている。そしてその目は恐怖と絶望に包まれ、光の欠片もなかった。何かを言おうと口をパクパクさせるが、喉から漏れるのは人の言葉には程遠い、ただの醜い嗚咽。

カチャリ、と“彼”が拳銃の撃鉄をゆっくりと起こす。銃口は迷う事なく、獲物の眉間にあつた。

「……っ、ま、ままま待つてくれえっ！ お、おおお俺がわ、悪かった！」

“追われる者”がようやく人の解する言葉を口にする。必死に命乞いをする醜い姿。だがそれは“追われる者”の意図とは裏腹に、“彼”の逆鱗に触れた。

ドンッ！

「ぎゃあああああっ！！！」

拳銃から飛び出した一発の弾丸は眉間ではなく、獲物の右肩を貫いていた。傷口からドバツと鮮血が溢れ、ドクドクと手を伝って階段を濡らしていく。

“追われる者”が再び何かを言おうとした。だが、それを口にする間もなく、

ドン、ドン、ドン、ドンッ！！

とりズム良く銃声が鳴り響き、それと同時に肉片が、鮮血が辺りに飛び散る。弾丸はそれぞれ“追われる者”の左肩、右腿、左腿、腹部を貫いていた。激痛のあまり言葉に鳴らない言葉を発しようとする“追われる者”の口の中に、耳障りとはかりに拳銃の銃口を突っ込む。

「……最初の一撃であの世へ送ってやるうかと思っただが、気が変わった」

“彼”が初めて声に出して言葉を口にした。

「貴様はこのまま苦しみながら死んでゆけ。それが貴様が殺したあの子の両親への……小さ過ぎる報いだ」

“追われる者”の口から拳銃を抜くと、“彼”はそのまま振り返る事もなく、自らがたつた今降りてきた長い長い階段を登り始めた。下から聞こえる言葉にならない嗚咽が、足を進める度に少しずつ小さくなっていく。

そしてやがて、聞こえなくなった。恐らく息絶えたのだろう。それでも“彼”は足を止めず、遙か高い場所にある出口を登り続けた。

十数分経った頃、ようやく出口へと“彼”は辿り着いた。そこでようやく、初めて“彼”は足を止め、一度下の方へと目をやった。日の光の届かない深い地下は、改めて見ると全てを飲み込んでしまっているようなブラックホールが広がっているような光景だった。

「人を殺した者が己の死を恐れるな。罪を犯した時点で、己は

相応の罰を受ける覚悟をしておけ」

出口へと飛び出した“彼”は初めて日の光に当てられ、その姿を現す。

「目には目を。歯には歯を。そして ……死には死を」

“彼”はまるで一羽の鴉のような、黒いマントに身を包んだ青年だった。

T o b e n e x t …

#1 「The Strange Mission」

#1 「The Strange Mission」

このアルグレイスの国で最も栄えているジークアレストの街から遙か東にある森の中にひっそりと佇む一軒家は、夜の暗闇だということに窓からは中に人がいないかと錯覚させる程、松明の明かりも電光の明かりも、一切漏れてはいない。辺り一面が静寂を保ち、時折動物達や風が草花を揺らしては再び静寂を保ち続けている。しかし空家のような存在のこの一軒家へと、近隣の街の人間ならば誰も近付こうとはしなかった。理由は明白である。

主に要人暗殺のギルド請け負いを専門とする“ヴァル一味”のアジトだからである。街で噂になる程の規模であれば当然国の要人の耳に届き、処置されるのが当然なのだろうが生憎、彼らへの依頼の大半はこの国の要人や関係者からなので、一応国家公認の殺し屋という事になる。

そして今日も国の要人 大臣であるギルバートから依頼が彼らの元に届いていた。

「……面倒」

「あ？」

思った事をつい口にしてしまったまだ少女とも言える顔立ちの女性が、机の上で頬杖をついていたその手を慌ててその口元へとやるが、言ってしまったものはもうどうしようもない。既に周りからは

冷たい視線が送られていた。

外から見てもまるで光はないのだが、その部屋には一応テーブルの中央にランプが置いてあり、面子のそれぞれの顔や表情、そして依頼状が見えるようになっていた。小さなテーブルに、4人がそれぞれ席に着いていた。

不機嫌そうな顔で、彼女の対面に腰を掛けている男性が溜息を吐いた。濃い藍色のターバンを頭に巻き、同色のローブを身に纏っている。口元の濃い髭が特徴的だ。今の季節の気温はどちらかというとな暖かく、夜になると蒸し暑くも感じられる。ましてやこの部屋は密封状態であり、油を縄に染み込ませた物を燃やしているランプが熱を放出していた。薄着をしている少女でさえ額に汗を浮かべているというのに、ターバンの男は涼やかな表情で汗一つ掻いていない。

「確かに面倒な依頼だ。だがな、やらない訳にはいかないんだ」

「断つてもメリットはありませんからねえ……。あ、デメリットなら沢山ありますよ?」

「んなこた今更言わなくなつたって、ルーシエだつて分かつてるさ。なあ?」

対面と両横から順々に言われ、ルーシエと呼ばれた女性はぼりぼりと頬を掻いた。

確かに言われなくても分かる事。否、この一味にいる以上分からなければならぬ事だった。今は国家御用達の殺し屋である以上、国からの依頼を断ればそれこそ軍隊がこのアジトへ押し寄せて彼らを始末するだろう。そうならないのは彼らが国にとって有益な存在であると認められているからで、そうでなくなった場合の末路は言う間でもない。例えばそれが嫌になり国外へ逃げ出そうとしても岸壁に囲まれたこの国から外に出る為には大きな谷を越えなくてはならず、そこには当然のように検問があり、各々の国王の直筆のサインが書かれた許可証がなければ通れないようになっている。その許可

証を貰う為には綿密な審査があり、お尋ね者同然の彼らが自ら許可証を取る事は不可能に近い。どの国に入るのも出るのもこのような仕組みになっている為、基本的には各国を行き来するのは商人達であり、一般人は己の生まれた国で一生を過ごすのである。

ルーシエと対面のターバンを巻いた男　この一味の頭領であるヴァルが口に啞えた煙草に火を点け、煙を肺に一杯に入れた後、ゆつくりと吐き出した。吐き出された煙はやがて勢いを無くし、ゆらゆらと天井に向けて登り始める。その光景をぼーっと見ていたルーシエに、やがてヴァルが口を開く。

「ルーシエ、お前が行け」

ぴくん、とルーシエは一瞬だけ頬を引き攣らせ、あからさまに嫌そうな表情を見せた。しかしすぐにいつもの表情へ戻し、ヴァルの目を覗き込むように見つめる。

「……貴方の命令であれば。しかし、何故私にこんな面倒な仕事を？」

「決まってる……俺達が面倒だからだ」

「……私は面倒な仕事の押し付けられ役ですか」

ルーシエは不機嫌そうに小さく溜息を吐いた。確かにこの一味の中では最も若く、最も未熟なのだろうが、彼女にはそれでも既に自分一人前であるという自信があった。ダガーナイフの扱いなら仲間内で一番上手く扱えるという自信もあった。

納得がいかない、といった表情でヴァルを見つめるルーシエに、やがて彼女の右隣の男性　アギトがフォローを入れる。

「ルー、ヴァルが言ってる事は冗談ですよ。ヴァルもほら、冗談を言うならもっと早くにフォローを入れないと本気に聞こえてしまい

ますよ。あなたの場合には特に」

「む……そうか、すまん」

「という訳で、今回の仕事はルーが適任であると私も判断します」

「どうしてですか？」

ルーシエの問いに、今度は彼女の左隣に座っている男性　バルドが答える。

「そりゃ、ルーシエが女で童顔だからだ」

「童顔童顔って言わないで下さい！　これでも二十歳なんですから！」

パンツ、と机を両手で叩きながら立ち上がり、彼女はバルドを睨み付けた。ずっと童顔だと、歳相応に見えないとからかわれ続けてきた彼女にとって既に彼のそのからかいにも慣れてきてはいるのだが、それでもどうしてもその言葉に身体が反応してしまう。街の酒場でも、ヴァル達がフォローを入れない限り酒を満身に注文する事さえ出来ない。

彼女にとって童顔で良かったと思える事なんてなかった。この仕事をしている以上、それは相手に馬鹿にされ、舐められてしまう。しかし相手を油断させるにはその方が良いという事は分かっているものの、基本的に標的の背後から気配を消して近付き一撃で仕留める以上、面と向かって標的を向き合う事はない為関係ない。

「とにかく、だ」

再び溜息を吐いたヴァルが口を開く。

「今回の依頼は、隣国であるリゲツを拠点とする同業者　” B I o o d y B l u e ” を壊滅させる事だ。だがしかし、その組織に

関わる情報は一切与えられていない。顔写真はおるか、男なのか女なのか、どこにあるのかもまるで分からん」

「つまり諜報活動からしなければならぬ訳ですね」

「そういう事だ。お前を選ぶ理由はそこにある訳だが、実はもっと大きな理由がある」

ヴァルはそう言って口に銜えていた煙草を灰皿へと押し付けると、懐から一枚の封筒を取り出し、中身である小奇麗な紙切れをテーブルの上に広げた。記載してあるのは細かな文章と、この国の国王の直筆サイン、そして“リイル”グラス”という名前。

「……“リイル”グラス」？」

手を伸ばしてその紙を手に取り、ルーシエはその紙に書かれている事を上から読み流していく。

「それが例の谷を通る為の許可証らしい。そしてそれが、今日からお前の名前だ」

「どういう事ですか？」

「それは知らん。ギルバートの阿呆がどういう訳か女の名前で許可証を作りやがった。俺ら男がそんな許可証を持って検問所まで行く訳がないだろう」

キナ臭い　ルーシエはそう思った。ギルバートもこの“ヴァル一味”の面子を把握している以上、女はルーシエ一人であるという事は承知の筈だった。それでいてわざわざ女の名前で許可証を作った理由は、裏に何かあると考えざるを得なかった。

「そういう訳だ、“リイル”。この仕事は、お前にしか遂行出来ん」

「……分かりました。支度して、明朝に発てるようにします」

気に食わない仕事だが、依頼された以上は遂行するしかない。ルーシエはテーブルの上に置いてあった封筒に許可証を入れ直し、そのまま支度をする為に自室へ向かおうと足を進めた。ぎしっ、ぎしっ、と床が音を立てる。テーブルから離れていくにつれて視界は闇に包まれ、それでも彼女は視界を当てにせず、自らの長年の感覚から自室へと辿り着き、扉を開いた。

扉を開いた後、ほんの一秒間ほどその場へ立っていたが、やがてゆっくりと部屋に足を踏み入れ、音もなく扉を閉じた。

「……本当に一人で行かせるんですか？」

時計の分針が何度か動いた後、アギトが口を開いた。心成しか、その声は先程より一際小さく聞こえる。

「行かせるしかないだろう。この仕事は、あいつがやるべき仕事なんだ」

「その理由をいつ彼女に告げるつもりなんですか？」

ヴァルの言葉に、アギトは溜息を吐きながら言った。

「……恐らく、一生告げる事はない」

ヴァルのその言葉を最後に、誰も喋らなくなった。

そしてやがて、どこからともなく部屋に入って来た小さな影がランプの火を吹き消し、部屋は完全に暗闇に包まれた。

暗闇の中、ただ時が刻まれていく音だけを、ヴァルは聞いていた。

T
o
b
e
n
e
x
t
:

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6421u/>

Bloody Blue

2011年10月7日15時18分発行